

子どもの自主性を重んじる教育とは

中野 理恵

モンテッソーリとは20世紀初頭に、イタリアで活動した教育学者マリア・モンテッソーリのこと。子どもは〈ちいさな大人〉ではなく、自由意思をもつ社会の一員であり、生まれながらに知ることを求め、学ぶ能力をもっている、と。いわば、子どもの自主性を重んじる教育法〈モンテッソーリ教育〉を編み出した。それは世界各地に広まり、今や140を超える国々で実践されているとのことだ。

本作は、〈モンテッソーリ教育〉を実践している北フランス最古のモンテッソーリ学校の幼稚園に、2年3ヵ月にわたり密着したドキュメンタリーである。登場するのは2歳から6歳までの男女の子ども28人と、クリスティアン・マレシャル先生だ。アレクサンドル・ムロ監督は、娘が生まれた時、〈自分の好きなようにやらせるのと、親が指示するのとどちらがいいのか〉との疑問から、モンテッソーリ教育を知り、本作を撮ることにしたそうだ。

数脚の低いテーブルとイスが置かれた広い部屋の片隅にある流し台で、子どもが何やら洗っている。アイロンがけをする子どもがいるのに、まず驚く。6歳のバルティはマッチでロウソクに火をつけるではないか。しかもそのマッチを持ったまま、じっと火を見つめているのだ。子どもに厳禁とされている熱いアイロンや火を、自由に使っている！子どもたちは、それぞれ、自分なりの方法でそのようなお仕事に熱心に取り組む。3歳のピエールは、異なる大きさのピンクの箱を積んで見事な塔を組み立て、シャルリは独り言を呟きながら道具をいじり、4歳のジェロは、ピッチャーに入れた水をグラスに移し、それらを載せたお盆を落とさないように、そろそろと運んだり、ある時は陶器のトレイに小さなふたつのピッチャーを載せ、やはり、落とさないように運んでいる。どう



©DANS LE SENS DE LA VIE 2017

やらお運びが好きなお仕事のようだ。不思議なことにケンカをしている姿はなく、子どもたちはそれぞれ自分のお仕事をするのに一所懸命だ。モンテッソーリ教育の本質は、集中力の獲得にある、との言説を実際に見ている思いだ。それほど、子どもたちは一心不乱である。

「他人のマネをしない」「自分で間違いに気づくことが大切」「無理強いするとやる気を失くす」「子どものやる気を育てること」「子どもに主導権を任せ、大人は受け身にまわる」「大人の役割は子どもが人生をつくり出す手助けをすること」等々、時折、モンテッソーリ自身による言葉が紹介される。中には「困っている友だちを助けない」と、ドキッとするような言葉もあり驚いたが、解決法は自ら考えるのが大切、との意味が込められているのだった。

自分で絞ったジュースをあげた女の子から、「私のことを好きな子がいるの」と言われたジェロが「誰？」と聞くと、「君のこと」と応えられて、嬉しそうにはにかむ表情が余韻に残る心地よい作品であった。

《Cinema Information》

『モンテッソーリ 子どもの家』

フランス映画(105分)／監督：アレクサンドル・ムロ
公開中

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。